

おわりに

脳の話とか薬の話を除けば、やさしかったでしょ。薬の話については、「はじめに」でも書きましたが、ポチポチでいいですから、覚えていってくださいね。とりわけスクールカウンセラーをはじめとする心理職の方、および養護教諭の方は、これぐらいの知識は必須ですので、しっかり学習してください。

本書には、薬の副作用の話がいっぱい出てきます。だから、これを読んで、ますます薬が怖くなった方もいらっしゃるかもしれません。しかし、やはり必要なときには薬は飲んだほうがいいです。精神の疾患は、何だかんだ言って「気合い」では何ともならない、あるいは「気合い」を入れすぎるとますます悪くなる（例えば、うつのように）ことが多いからです。また、カウンセリングというものに、過度な期待をかけるのも考えものです。必要なときに、適切なお薬を、適切な量、適切な飲み方で飲むことによって、救われる方はたくさんいらっしゃいます。皆様ご自身もそうされたほうがいいですし、人にもそう勧めてあげてください。そして人に勧める際には、例えば本書に書いてあるような言い方で、きちんと説明してあげてください。そのための勉強です。

本書は、学校関係者を中心とした一般の方々向けの本ですので、治療論やかかわり方に

ついでには、普段の生活のなかでのかかわりと医療機関へのつなげ方に焦点を当てて書きました。より詳しい心理療法の方法については、他書を参考にさせていただければ幸いです。

第一巻は、子ども時代からその症状や障害が見えてくる精神障害の話でしたが、本巻に盛り込まれている障害は、多く青年期以降に発症するものです。したがって、内容的には、「教師やスクールカウンセラーのための」といった読者を限定するものとはなっておらず、その他一般の多くの方にもお読みいただければ、私としてはうれしいことの上な事です。もちろん、学校関係者も、特に高校年齢以上の生徒さんたちのかかわりが多い方々は、本書が読者層として狙っている重要なターゲットです。本書に盛られているものだけでなく、すべての精神疾患は、高校年齢までに発症する可能性があります。したがって、適切な対応をするためには、知識が必要となります。

さらに、精神疾患のなかでも統合失調症の解体型は、この時期に発症する代表的な精神疾患の一つです。統合失調症は、早期に発見され、早期に適切な介入が行われた場合と、それが遅れた場合とでは、予後が違ってくると言われていきます。ですので、しっかりと勉強され、発見と適切な介入を、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、本書編集の労をおとりいただきました、ほんの森出版の小林敏史氏に深く感謝申し上げます。小林氏なくして本書の出版はありえないことであり、またこれからもまだまだお世話になります。本シリーズは次巻の第三巻で完結ですが、それまでの数年間、森をお見捨てなきよう、よろしくお願い申し上げます。